

アウグスティヌス『告白』のキアスムス構造に於ける
新プラトン主義

山田 庄太郎

『宗教学・比較思想学論集 第13号』抜刷
2012年3月 筑波大学宗教学・比較思想学研究会 発行

アウグスティヌス『告白』のキアスムス構造に於ける 新プラトン主義

山田 庄太郎

1 目的ならびに問題の所在

本稿は、アウグスティヌスの著作『告白』の中で新プラトン主義がいかん位置づけられているかを、新プラトン主義についての彼の明示的な言及を基に論じるものである。

20世紀のアウグスティヌス研究の進展は、新プラトン主義者の、とりわけプロティノスの研究の進展と軌を一にしてきた。事実、プラトン主義への回心が存在したか否かという初期の問いは (cf. Portalié 1960, pp. 15–16)、アンブロシウスを例とする新プラトン主義的なキリスト教の伝統の存在が示されたことによって解決され (Courcelle 1968, esp. pp. 93–138, 154–155)、以後アウグスティヌスと新プラトン主義との緊密な結びつきが研究者間で認められるようになる。アウグスティヌスに対する新プラトン主義の影響については、それをどの程度のもものと評価するかという点を除けば、既に長きに亘り研究者間の共通の認識となっていると言ってよい。

一方、近年のアウグスティヌス研究の進展は、二つの上昇体験、すなわち、それぞれミラノとオステアでアウグスティヌスの上に生じた二度の神秘体験の間の質的な差異を次第に明らかにしつつある。

ミラノに於いてアウグスティヌスは、「ギリシア語からラテン語に翻訳されたあるプラトン派の書物」を手にした後 (Conf. 7, 9, 13)、「自らの内奥へと進み行き……自らの魂 [anima] の目で……この魂の目の上に、即ち自らの精神の上に不変の光を」見るのであり (Conf. 7, 10, 16)、それによって「ゆれ動く眼差しの一撃の内に『存在するもの』に到達」する (Conf. 7, 17, 23)¹。また、彼はオステアに於いて、母モニカと共に、この「それ自身なる者へと非常に激しい熱情を抱いて立ち上り……我々の精神の内へと……上昇し、それをも越えていった」(Conf. 9, 10, 24) ののである。

この二つの上昇体験に関して、O'Donnell (1992, v. 3, p. 124) は、まず Mandouze (1968, p. 697) のミラノとオステアの上昇体験には「本質に於いてはいかなる相違も全く存在していなかった」という説を紹介した上で、これを「極端なもの」として「誤った判断」であると退ける。その上で、O'Donnell (ibid. p. 128) はオステアでの体験が「プラトン派の書物によって見出したものよりもより良いものであるが、但しそれと異なったものではないし、固有的に非常に良いわけでもなく、プラトンのな神秘主義の卓越性の否定でもなく、ただより良いもの」としてアウグスティヌスによって描かれていると結論づけている。

こうした O'Donnell の説は新プラトン主義的キリスト教の伝統の存在を指摘した先述

の Courcelle の論を踏まえたものである。それに対し Williams (2002) は、二つの上昇体験の筆致の相違に関するその詳細な分析から、興味深い考察を行っている。彼によれば、アウグスティヌスは『告白』に於いて新プラトン主義的な神秘体験としてミラノ体験を描きつつも、それを非人格的な抽象原理としての真理の下でこの真理を「見る」体験として位置づけており、受肉した神の下でこの神の声を「聞く」オスティアの体験と鋭く対比させている。そして、この目的は新プラトン主義的知を最終的に無力なものとして描き出す点にあり、従ってプラトン主義的色彩を帯びた「神秘体験」の有限性を示す為にオスティア体験もが（ミラノ体験に比しその豊穡さを称えられながらも）一過的性質のものとして位置づけられていると、彼は主張するのである。

以上のように『告白』の上昇体験に限っていえば、アウグスティヌスは少なくとも、新プラトン主義に対し一定の距離を保っているように見える。特に『告白』に於いてはプラトン派への言及がこの上昇体験の箇所に限られていることもあり、我々はあたかも初期の著作に於ける「新プラトン主義の無批判的借用の拒絶」(Williams 2002, p. 174 note 6) がこの著作の中に見出されるかのような印象を受けるのである。

これに対し本稿では、構造論的観点から『告白』に於ける新プラトン主義についての語りを分析することを通し、同書に於いて新プラトン主義がどのように位置づけられ、かつまたいかなる機能を有しているかを明らかにすることを試みる。ここから、アウグスティヌスに於ける新プラトン主義の影響を論じる為の新たな視座が得られることであろう。

2 『告白』に於ける新プラトン主義——「プラトン派の書物」

『告白』に於ける新プラトン主義²についての言及は、代名詞を除いて明示的にその名称を用いている箇所だけを数えるならば驚くほどに少ない。第7巻に最初の用例が登場するが、同巻には計2箇所の用例があるのみで、続く第8巻で7巻当時のことを回想する箇所を含めても『告白』全体で3つの用例が存在するのみである。

この名称の不在は特筆に値する。ここでは以降の考察の為にそれら3つの用例を簡単に確認しておきたい。

第一の用例は新プラトン主義の名称の導入である。

【用例1】

そこであなたはまず、「傲慢な者達を敵とし、謙遜な者達には恵みをお与えになる」(Iac. 4:6, 1 Petr. 5:5) ということをし、そしてまた「御言葉が肉となって、人間達の間で宿った」(Ioh. 1:14) ことで人間達に対し謙虚の道を示したあなたの偉大な憐れみを、私に示そうと欲して、甚だしい傲慢によって膨れ上がった人を通じ、ギリシア語からラテン語に翻訳されたあるプラトン派の書物 [quidam Platoniorum libri] を私に充てがって下さった。(Conf. 7, 9, 13)

この【用例1】に続く章から、ミラノでの上昇体験が語られる。

第二の用例は、この上昇体験を振り返るものであると共に、このプラトン派の書物がアウグスティヌスの上に何をもたらしたかを語っている。

【用例2】

しかしそのとき、私はかのプラトン派の書物 [Platonicorum illi libri] を読んで、その後それによって非物体的な真理を探究するよう促がされて、「あなたの見られないものを、造られたものによって知解し」(Rom. 1:20) 認めたのであるが、突き返され、私の魂 [anima] の闇の故に観照されることの許されていない何ものかを感じた。(Conf. 7, 20, 26)

第三の用例は『告白』8巻に位置する。

【用例3】

それで、私はシンプリキアヌスの下を訪れた……。私は彼に自らの誤謬の紆余曲折を語った。然るに私がウィクトリヌス……がラテン語に翻訳したあるプラトン派の書物 [quidam libri Platonicorum] を読んだことを語った所で、彼は、「この世の浅い知恵に従って」(Col. 2:8) 虚偽と欺瞞とに満ちている他の哲学者達の書に私が触れたのではないことを、そしてまたそれに対して、かの [プラトン派の] 書物の内にあらゆる仕方で神とその御言葉が浸透していることを、私の為に喜んだ。(Conf. 8, 2, 3)

以上の3つの用例から気づかされることは、第一にこれらの用例が全て「プラトン派の書物」[libri Platonicorum] という語句を形成していること、第二に全ての用例が『告白』7巻に密接に結び付けられていることである。実際【用例3】は『告白』8巻に配置されているものの、語りの時制は、同書7巻で語られる31歳当時のアウグスティヌスを明確に指し示している。そして以下に見るように、これら二点が『告白』前半巻の構造論的解釈という観点から重要な意味を持つことになるのである。

3 『告白』1-9巻のキアスムス構造とそこでの新プラトン主義の位置づけ

『告白』前半巻に関しては、既にいくつかの構造論的解釈が提出されてきた。O'Meara (2001 [1954]) と Knauer (1957) の説を受けて O'Connell (1969, pp. 11-12) は、『告白』の物語を、その本来の在り方である神の観照から離れてこの世界の内をさま迷っている魂が再び神を見出すまでの「魂の遍歴」[peregrinatio animae] であると規定する。このように見る時『告白』1-9巻で語られるアウグスティヌスの自伝的物語は、8巻のキリスト教への回心を軸にした知的内省的な物語として捉えられる。

また O'Donnell (1992, v. 1, pp. xxxv-xxxvi) は、『告白』の内に「ヨハネの手紙一」2:16を基礎にした「三誘惑構造」が見出せるとしている。即ち、2巻で「肉の欲望」[concupiscentia carnis] が、3巻では「目の欲望」[concupiscentia oculorum] が、4巻では「世俗的野心」[ambitio saeculi] が語られており、対象的に6巻では世俗的野心の克服が、7巻では目の欲望からの克服が、8巻では肉の欲望からの克服が示されているとするのである³。このO'Donnellの説は『告白』前半巻に伏在する対称的構造を示した点で特筆に値する。

これらの研究成果に対し、加藤 (2006, pp. 89-90) は、母モニカの下での素朴な幼少期のキリスト教信仰が語られる1巻と、遍歴を経た後の壮年期の成熟したキリスト教信仰

と母モニカの死が語られる9巻が対称的構造を有していることを示した上で、その間に挟まれた2-4巻と5-8巻がそれぞれ離向 *auersio* と帰向 *conuersio* の過程であることを指摘した。さらに宮本(2009)はこの加藤の指摘を受け、『告白』1-9巻の各巻がキアスムス的構造を形成していることを明らかにしている⁴。

宮本の指摘に従い『告白』1-9巻の各巻の構造を改めて示すならば、次表の様になる。

(A)	1巻	修辞学の学習		1-15歳 少年期	(三つの誘惑以前)
		母モニカの信仰と受洗の延期			
(B)	2巻	悪しき仲間との交際		16歳 青年期	肉の欲望
		「梨の木の実」の盗み			
(C)	3巻	『ホルテンシウス』と聖書への失望		17-19歳	目の欲望
		マニ教への入信			
(D)	4巻	内縁の女性との出会い		19-28歳	世俗的野心
		物縁的なものに囚われ霊的なものを見ない			
(E)	5巻	ファウストゥスとの邂逅と失望		29歳	
		アカデミア派の懐疑主義への傾倒			
		ミラノでのアンブロシウスの説教			
(D)	6巻	アンブロシウスによる聖書の霊的意味の開示		30歳	世俗的野心の克服
		内縁の女性との別れ			
(C)	7巻	「プラトン派の書物」と聖書の研究		31歳	目の欲望の克服
		マニ教との訣別		壮年期	ミラノの上昇体験
(B')	8巻	善き仲間との交際		32歳	肉の欲望の克服
		「無花果の木」の下での庭園の回心			
(A')	9巻	修辞学教師を退く		33歳	(三つの誘惑以後) オステティアの上昇体験
		受洗と母モニカと共なる信仰			

ここに提示したキアスムス構造は、『告白』前半巻が第5巻のアカデミア派の懐疑主義への傾倒を転回点に⁵、離向と帰向の過程を描く物語であることを示している。

然るに、前節で触れたように、『告白』に於けるプラトン主義への言及は、全てが「プラトン派の書物」という形で為されており、また同書7巻と切り離しがたく結び付けられていた。このように見る時、我々は「プラトン派の書物」が、『告白』前半巻のキアスムス構造の中で、第3巻で語られたキケロの『ホルテンシウス』のカウンターパートとして配置されていることに気づかされる⁶。従って『告白』に於ける「プラトン派の書物」の影響について考える際、我々はこの『ホルテンシウス』との関係を常に念頭に置く必要がある。

4 『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」

『告白』第3巻でアウグスティヌスは19歳の時にキケロの著した『ホルテンシウス』を手にした時のことを語っている。『ホルテンシウス』は、アウグスティヌスに対し、知恵への愛を燃え立たせると共に（*Conf.* 3, 4, 8）、聖書の単純な文体への失望をもたらした（*Conf.* 3, 5, 9）、「理性的な」宗教としてマニ教への入信に至らしめたのであり（O'Connell, 1969, p. 53）、この点について諸家の見解は一致している。

他方、「プラトン派の書物」は、マニ教への訣別の念をアウグスティヌスの内に生じさせ、かつまた聖書への回帰を可能ならしめる動因として機能しているように思われる。

しばしば指摘されるように、アウグスティヌスがマニ教の誤謬へ陥った最大の要因は、そこに理性主義的なキリスト教を見たからであった。マニ教徒は「真理、真理」と叫び多くのことを語ったが、神についてだけではなく、哲学者達がそのことに関して真なることを述べていた「この世界の元素」についても多くのこと——『告白』執筆時のアウグスティヌスはこれらのマニ教徒の主張を明確に「虚偽」と述べているが、これは裏を返せばマニ教徒となった当時の彼がそこに「真理」を見たことを意味している——を語ったと言われる（*Conf.* 3, 6, 10）。しかしながら、マニ教の内に哲学者達の説く自然学的知識と信仰との調和を求めようとする彼の試みは行き詰まり、高名なマニ教の教師ファウストゥスも彼の望みには応えられなかった⁷。

その結果、アウグスティヌスは事柄の真偽に対して、アカデミア派式の懐疑的態度をとるに至るが、これが既存の信念体系に囚われない自由な探求の可能性を切り拓き、アンブロシウスの下での聖書の霊的解釈への習熟に繋がるのである⁸。しかしこれは未だ「よりもっともらしいもの」[probabiliora]としての聖書ないしニカエア・キリスト教という可能性を切り拓いたに過ぎない。蓋然性に従う限りで彼は「留保によって殺されていた」（*Conf.* 6, 4, 6）のであり、信仰へと参与する道を閉ざされていたと言える⁹。彼は、既に熱心なマニ教の聴聞者ではなかったが、マニ教に代わる確かなものが見出せぬまま、未だマニ教の迷妄の内に留まらざるを得なかったのである¹⁰。

それに対し、「プラトン派の書物」を手にするによってアウグスティヌスは我々がミラノ体験と呼ぶ上昇体験を経験する。

【用例 1】の直後の章で、アウグスティヌスは「これら [プラトン派] の書によって自分自身へと立ち返るよう促がされ、あなたに導かれつつ自己の内奥へと進み行」き、真理を、この「真理の存在を疑うよりもむしろより容易に自分が生きていることを疑う」ような仕方で見出したと述べる（*Conf.* 7, 10, 16）。彼はマニ教時代、神を「世界の内に注ぎ込まれているにせよ、世界の外に無限に広がっているにせよ、空間に広がって存在する何か物體的なもの [corporeum aliquid per spatia locorum] と考えるよう強いられていた」が（*Conf.* 7, 1, 1）、この上昇体験の結果、真理が「有限の空間にも無限の空間にも広がっていない」非物體的なものであることを知る（*Conf.* 7, 10, 16）。またこの真理は「万物を極めて善く創った」（Gn. 1:31, Sir. 39:21）のであり、今や悪はマニ教の説くような実体ではなく、善の欠如として理解されることになるのである（*Conf.* 7, 12-16）¹¹。

この「不変で真である永遠の真理」（*Conf.* 7, 17, 23）の発見は、【用例 2】に於いても強調されるところである。確実なものが明らかにされた今、信仰に対する留保は存在し

ない。またプラトン主義的な二世界論に基づく非物的なものへの気づきと、悪に対する新たな解釈は、マニ教の善悪二原理論と物質主義的思考枠の克服に直結する。従って、アウグスティヌスはここに於いて、再び聖書を手にとる資格を得たのである。

実際【用例2】の次の章で、彼は「聖書を読み始めると、先にそこ [i.e.プラトン派の書物] で読んだ真理が皆ここに、あなたの恩恵を称えながら語られていることを見出した」と告白する (Conf. 7, 21, 27)。この意味で「プラトン派の書物」は、確かにマニ教との訣別の、そしてまた再び聖書を手取る為の一つの契機として位置づけられていると言えよう。

5 『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」、そして聖書

しかしながら【用例1, 2】のいずれの箇所にも、プラトン派の書物の内に見出し得なかったものが挙げられている。たとえば【用例1】のある『告白』7巻9章13には、「民は御言葉を受け入れなかった」が、その「御名を信じたものには誰にでも、神の子となる権能を与えられた」という章句 (Ioh. 1:11-12) は見出しえなかったとされ、【用例2】の『告白』7巻20章26には「イエス・キリストという謙虚の土台の上に立てる愛」 (cf. 1 Cor. 3:11) をこのプラトン派の書物は教えなかったと言われる。

確かに『神の国』を見れば明らかなように、アウグスティヌスは少なくともキリスト教に対するその論駁によって知られるポルフュリオス (234-c. 305) のような新プラトン主義者と自らとを区別する必要があった (DCD 8-10; esp. 10, 26-32)¹²。アウグスティヌスの結論は明解であり、キリスト教が「至福の国へと導く道であり、ただ眺めるのみでなくそこに住まわせるに至る道」と規定される一方で、プラトン派の人々は「行くべきところを知りながら、いかなる道を以てそこに行くかを知らない人々」であると言われるのである (Conf. 7, 20, 26)¹³。

しかしこうした新プラトン主義の限界性についての見方は、Williams (2002, p.177) の言うような単なる新プラトン主義的知の無力さに直結するものではない。

先に引用した「聖書を読み始めると、先にそこ [i.e.プラトン派の書物] で読んだ真理が皆ここに、あなたの恩恵を称えながら語られていることを見出した」というアウグスティヌスの言葉は、キリストの教えとプラトンのそれとが相容れないものとしてあるのではなく、むしろ後者が前者の内に包摂される形で理解されるべきものであることを示しているように思われる。『告白』の一連の叙述の中で、聖書は、いわばプラトン派の書物の不足を補い、真の救済を約束するものとして立てられているのである。

我々は、『ホルテンシウス』を手にしたアウグスティヌスが、決してキケロの哲学に回心したわけではなく、「あなたの御名と主イエス・キリストの御名と我々の弁護者 [paracletus] であり慰安者である聖霊の音節を混ぜ合わせて作られた鳥もち」 (Conf. 3, 6, 10) が塗られたマニ教へと回心したということ、ここで思い起こす必要がある¹⁴。『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」の両者は共に聖書との関連で語られる。そしてこの二つの書物は、聖書に対する対称的な評価をもたらすのである。

『ホルテンシウス』は聖書への失望の、そしてまた間接的ではあるが、マニ教への入信の契機として描かれていた。一方「プラトン派の書物」は、それに呼応するように、

マニ教の編纂した聖典ではなく、ニカエア・キリスト教教会の編纂した聖書を再び手に取る為の一つの契機として描かれる。これら二つの著作が、アカデミア派とストア派とを折衷した哲学者キケロ¹⁵と、プラトン派にそれぞれ帰されている点は示唆的である。

我々は散逸した『ホルテンシウス』の正確な内容を知ることが出来ないが、少なくとも次のことを指摘し得る。即ち、アウグスティヌスにとり、靈的で確実なものを教えるプラトン哲学——あるいはその純粹な復興体としての新プラトン主義——は、懷疑主義を特徴とするアカデミア派ならびに物質主義的なストア派の双方と対立するものであったという点である（CA3, 18, 41）。

事実、『アカデミア派駁論』によればアカデミア派懷疑論は、ストアの教えに対し「反対のことを教える *dedocere*」ものであるが、プラトンの教え或いは新プラトン主義からは区別され、その本来の教えを懷疑によって「覆い隠した」ものとして規定される（CA3, 17, 38）。即ち、アウグスティヌスにとり、彼が新プラトン主義の最大の特徴と看做す靈的なものについての教えは、アカデミア派ストア派の両者の内に等しく見出され得ないものとして規定されるのである。

従って『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」との対置は、キケロによって灯された知恵への愛がこの偉大なラテン作家の名から想定されるストア的、アカデミア派的思考形式から今や離れて、新しい知の枠組みへと昇華していくことを予示するものと言えよう。そしてこれによってマニ教からの離反は、「理性的」キリスト教の放棄と土着的で素朴なキリスト教への回帰としてではなく、むしろより「理性的で哲学的な」思想としてのニカエア・キリスト教の「再」発見として読まれることが可能となるのである¹⁶。

6 深層に於ける影響——聖書解釈と新プラトン主義

この理性的で哲学的な宗教としてのニカエア・キリスト教の発見こそ、まさに、【用例3】に於いてシンプリキアヌスがアウグスティヌスが「他の哲学者の書」ではなく「プラトン派の書物」を手にしたことを喜んだ理由であろう。シンプリキアヌスを含む新プラトン主義的キリスト教の伝統に属する人々にとり¹⁷、「プラトン派の書物」には「神とその御言葉が浸透している」のであるが、それは、聖書を解釈する為の一つの知的枠組みとして新プラトン主義が受容されていたことを意味しているように思われる。

実際『告白』12巻13巻で展開される聖書解釈の中でアウグスティヌスはプラトンのな枠組みを縦横に駆使している。その一つの例として、『告白』12巻に於ける「天の天」についての解釈が挙げられよう。「創世記」1:1の「初めに神は天と地とを創った」という一節内の「天」の語を、彼は「詩篇」113:24（113B:13）の「天の天は主のもの」¹⁸という一節と結びつけ、我々が普通目で見ると「天」と区別して解釈する。

実際その故にこの物的なもの全ては、いかなる所に於いても全体ではないが、最果ての諸部分——その最下層が我々の地である——に於いても美しい形相 [*species pulchra*]¹⁹を手にしてはいる。しかしかの「天の天」に対しては我々の地の天もまた地であるのである。そしてこの偉大な物体の両者 [i.e. (可視的な) 天と地] が正当にも、それがいかなる性質のものであるかを私は知らないかの [天の] 天—

—それは主のものであり人の子らのものではない—に対しては地であるのである。(Conf. 12, 2, 2)

ここでアウグスティヌスは、ニカエア・コンスタンティノポリス信条 (381 年) の第一文に記された「天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主」という一節を²⁰、「見えないもの」を「天」に「見えるもの」を「地」にそれぞれ充てた上で、この「天」を「天の天」として、そしてまた「地」を「偉大な物体」——即ち物体的可視的な天と地——として解釈しているように見える。人格的な神による天地の創造という極めてキリスト教的な主題が、物体の属する可感的世界と形相の場としての可知的世界についてのプラトンの区分に基づいて解釈されようとしているのである²¹。

確かに聖書解釈を行う『告白』後半卷には、プラトンあるいはプラトン主義に対する明示的言及は存在しない。しかしこの名称の不在は、その言及を『告白』7 巻に集結させることによって『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」との対比を描くという目的に第一義的には帰せられるように思われる。前節で論じたように、この二つの書物の対比は、キリストの教えを優れて「理性的で哲学的な」教えとして位置づけようとするものであった。そして上記引用箇所においてアウグスティヌスは、極めて明瞭なプラトンの構図を暗黙の裡に聖書解釈の中に持ち込むことによって、自らがかつてその文体の単純さに失望した聖書を、今改めて哲学的な思惟に耐え得るものとして実際に提示してみせるのである。

先に引用したように『告白』7 巻で彼は、プラトン主義を「行くべきところを知らながら、いかなる道を以てそこに行くかを知らない」と評し、「御名を信じたものには誰にでも、神の子となる権能を与えられた」という章句や「イエス・キリストという謙虚の土台の上に立てる愛」をプラトン派の書物の内には見出せなかったと告白する。しかしこれはプラトン主義の限界性を示すものというよりも、むしろ救済論的目的を導入することでプラトン主義に適切な方向付けを行うことを意図したものと見るべきであろう。

このような彼の基本的な態度は、初期の著作である『真の宗教』に既に示されている。アウグスティヌスはそこでソクラテスやプラトンが「再びこの世の生を我々と共に送ることが出来たとしたならば、彼らは、いかなる者の権威によって非常に巧みに人間に対する配慮が為されているのかを確かに理解したであろうし、言葉と内容とのわずかな変更によって、近年の我々の時代の多くのプラトン派の哲学者達がそうであるように、キリスト教徒になったことであろう」と述べるのである (*De vera rel.* 4, 7)。ここで彼は救い主であるキリストの名の下、プラトン派の「言葉と内容とのわずかな変更」を要求しているが、これは先に引用した「聖書を読み始めると、先にそこ [i.e. プラトン派の書物] で読んだ真理が皆ここに、あなたの恩恵を称えながら語られていることを見出した」という一節に呼応するものと言えよう。

確かに『教師論』で示される「内なる教師としてのキリスト」の概念は、恩恵を欠いた所に真の知が成立しえないことを示している (*DM* 11, 38-40)²²。とはいえ、アウグスティヌスは、新プラトン主義を完全に排斥しようとするのではなく、拡張を加え、それを包摂しようと試みるのである。彼はいわばプラトン哲学を聖書の内へ昇華させるのであって²³、二項対立的な見方の下にプラトン哲学を捉えているのではない。少なくとも

『告白』の構成は、このような立場を提示することによって初めて、真の知恵への愛がそこへと向かうべき対象としてキリスト教を描き出すことになるのである。

7 まとめ

以上の考察から、我々は次のように言うことが出来るだろう。

アウグスティヌスは『告白』に於いて、プラトン派への明示的な言及を7巻へと集約させているが、これはキリスト教を本質的に理性的で哲学的な体系として位置づける為であったように思われる。その際に効果的な道具として用いられたのが、キアスムス構造内での『ホルテンシウス』との対応関係であり、語りの上での新プラトン主義とキリスト教との対置であった。

ミラノの上昇体験に関する『告白』の語りそれ自体は、プラトンの教えの有限性を確かに認め、キリスト教的立場からこのギリシアの哲学に対する一定の留保を示している。しかしながらより広い文脈から同書を眺めるのであれば、アウグスティヌスがプラトン主義の基本的思考枠を肯定していること、そしてまたそこからいくつかの「傲慢」を取り去り、適切な補強が為されたものとして、即ちより「理性的で哲学的な」思想としてキリスト教を位置づけていることが了解される。この意味で、ミラノの上昇体験はWilliamsの言うような単なる新プラトン主義的知の無力さを提示するものとして理解されてはならないのである²⁴。

『告白』執筆当時の思想的に成熟したアウグスティヌスが、このような仕方でも、キリスト教思想を理性的で哲学的なものとして描き出そうとしている点に我々は注意を払うべきであろう。なぜならこうした『告白』の語りの特徴を踏まえることで、同書後半巻の彼の聖書解釈についての新たな展望が切り拓かれるように思われるからである。

【略号】

アウグスティヌスの著作は以下の略号を以て示す。引用は既存邦訳を参考に適宜改変。著作内の聖書の引用は新共同訳を参照しつつも原文に則して一部変更を加えた。

CA: *Contra academicos* (『アカデミア派駁論』)

Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum (=CSEL) v. 63, Sancti Aureli Augustini opera, s. 1, p. 3, *Contra academicos libri tres* ..., recensvit Pius Knöll, New York: Johnson Reprint, reprint 1962 [1922].

「アカデミア派駁論」清水正照訳、『初期哲学論集 (1)』(アウグスティヌス著作集1 (=著作集)) 教文館、第3版 1992 [1979]年。

Conf.: *Confessiones* (『告白』)

O'Donnell 1992.

Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de saint Augustin (=BA) 13–14, *Les Confessions*, texte de l'édition de M. Skutella, intr. et notes A. Solignac, trad. E. Tréhorel et G. Bouissou, Paris : Desclée de Brouwer (=DDB), 1962.

「告白」山田晶訳、山田晶編『アウグスティヌス』(世界の名著14) 中央公論社、1968年。

『告白』上下巻、服部栄次郎訳、岩波文庫、改訳版 1976年。

『告白録』(著作集5/1–2) 上下巻、宮谷宣史訳、教文館、1993–2007年。

CEF: *Contra epistolam Manichaei quam vocant Fundamenti* (『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』)

BA 17, *Six traités anti-manichéens: ...IV. Contra epistolam manichaei quam vocant fundamenti* ..., texte de l'édition benedictine, trad., intr. et notes R. Jolivet et M. Jourjon, Paris : DDB, 1961.

「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」『マニ教駁論集』(著作集7) 岡野昌雄訳、教文館、1979年。

DCD: *De civitate Dei* (『神の国』)

BA 33–37, *La Cité de Dieu*, texte de la 4^e édition de B. Dombart et A. Kalb, intr. et notes G. Bardy, trad. G. Combès, Paris : DDB, 1955–1960.

『神の国』全5巻(著作集11–15) 赤木善光他訳、教文館、1980–1983年。

De div. Qu. 83: *De diversis quaestionibus LXXXIII* (『83問題集』)

BA 10, *Mélanges doctrinaux; Quaestiones 83* ..., texte de l'édition Bénédictine, intr. trad. et notes G. Bardy, J.-A. Beckaert et J. Boutet, Paris : DDB, 1952.

DM: *De Magistro* (『教師論』)

BA 6, *Dialogues philosophiques III : De l'âme à Dieu; I. De magistro, II. De libero arbitrio*, texte de l'édition Bénédictine, intr., trad. et notes F. J. Thonnard, Paris : DDB, 1941.

「教師論」『初期哲学論集 (2)』(著作集2) 茂泉昭男訳、教文館、第4版 2002 [1979]年。

De vera rel.: *De vera religione* (『真の宗教』)

BA 8, *La Foi Chrétienne; De Vera Religione* ..., texte de l'édition Bénédictine, intr. trad. et notes J. Pegon, Paris : DDB, 1951.

「真の宗教」『初期哲学論集 (2)』(著作集2)。

【参考文献】

- Courcelle, Pierre P. 1968 [1950]: *Recherches sur les Confessions de Saint Augustin*, Paris: Éditions E. de Boccard, nouvelle éd.
- Denzinger, Henricus, and Schönmetzer, Adolfus (ed.), 1976: *Enchiridion Symbolorum: Definitionum et Declarationum de Rebus Fidei et Morum*, Barcelona / Freiburg im Breisgau / Roma: Herder, 36th ed.
- Du Roy, Olivier 1966: *L'Intelligence de la foi en la Trinité selon saint Augustin, genèse de sa théologie trinitaire*, Paris, Etudes augustinienes.
- Knauer, Georg N. 1957: "Peregrinatio Animae: zur Frage der Einheit der Konfessionen," *Hermes*, 85, pp. 216–248.
- Mandouze, André 1968: *Saint Augustin: L'Aventure de la raison et de la grâce*, Paris: Études augustinienes.
- Nussbaum, Martha 1999: "Augustine and Dante on the Ascent of Love," In *The Augustinian Tradition*, ed. G. Matthews, Berkeley: University of California Press, pp. 61–90.
- O'Connell, Robert J. 1969: *St. Augustine's Confessions: the Odyssey of Soul*, Cambridge: Harvard U. P.
- O'Donnell, James J. 1992: *Augustine, Confessions; Text and commentary*, 3 vols., Oxford: Clarendon Press.
- O'Meara, John J. 2001 [1954]: *The Young Augustine: the Growth of St. Augustine's Mind up to His Conversion*, NY: Alba House, 2nd and revised ed.
- Portalié, Eugène 1960: *A Guide to the Thought of St. Augustine*, Library of Living Catholic Thought, trans. R. J. Bastian, Chicago: Henry Regnery Company.
- Williams, Thomas 2002: "Augustine vs Plotinus: The Uniqueness of the Vision at Ostia," Inglis, John. (ed.), *Medieval Philosophy and the Classical Tradition: In Islam, Judaism and Christianity*, Curzon Press: Richmond, pp. 169–179.
- 加藤信朗 1976: 「CONSULERE VERITATEM(Augustinus, De Magistro, XI,38-XI,40)—アウグスティヌスの初期照明説をめぐる若干の考察—」『中世思想研究』18, pp. 21–44.
- 2006: 『アウグスティヌス『告白録』講義』知泉書館。
- 田中龍山 2001: 「アウグスティヌス『アカデミア派論駁』における懐疑論批判—「もっともらしいもの(probabile)」概念の再考—」『中世哲学研究』20, pp. 23–41.
- 出村和彦 2011: 『アウグスティヌスの「心」の哲学—序説—』(岡山大学文学部研究叢書 33) 岡山大学文学部。
- 宮本久雄 2009: 「アウグスティヌス文学のヘブライ的地平—『告白録』第一～第九巻における「キアスムス(交差対応的配列法)」構造—」『パトリスティカ』13, pp. 142–148.
- 山田庄太郎 2010a: 「アウグスティヌスによる悪の問題の克服—マニ教の克服と新プラトン主義の受容—」『哲学・思想論叢』28, pp. 21–34.
- 2010b: 「マニ教徒ファウストゥスのマニ教理解について」『宗教研究』366, pp. 1–23.
- 2011: 「アウグスティヌス『告白』におけるアカデミア派懐疑論の二重の役割」『宗教学・比較思想学論集』12, pp. 65–71.

【註】

- 1 Du Roy (1966) と Williams (2002) に従い、本稿は『告白』7巻10章16と同巻17章23とが同一の体験を異なる機会に記述したものと看做す。
- 2 アウグスティヌスは、プロティノスをアカデミア派の諸哲学者から区別して真のプラトン哲学の復興者と位置づけている (CA3, 18, 41)。彼にとりプロティノスの哲学こそ真の「プラトン哲学」であった。このような見方下では新プラトン主義のあるいはプラトンの独自性は捨象される。本稿では新プラトン主義の語を用いる場合も単にプラトン派ないしプラトン主義の語を用いる場合も、彼のこの用法に従う。
- 3 無論、この「克服」の語は、彼がそれらの欲望から完全に自由であることを意味しない。転倒した意志に対する恩恵の下での絶えざる克己の試みの第一歩が踏み出されたのである。『告白』に於いて自由意思の概念が恩恵の下にとらえられていることについては出村 (2011, pp. 130-143)。
- 4 キアスムス即ち交差配列法は、読者へのより大きな効果を狙い、互いに関連する二つ以上の節を反転した構造によって結びつける修辞法の一つである。各節は平行構造を有し、最も単純な形としては <AB (交差点) B'A'> という形をとる。キケロやセネカといったラテン文学だけでなく、旧約新約両聖書の内にもその用例が見出される。
- 5 『告白』前半巻に於いて、アカデミア派懐疑論が構造論上二重の役割を担わされており、全体の転回点と位置づけられている点については山田 (2011)。
- 6 『ホルテンシウス』の名は『告白』3巻4章7と8巻7章17の2ヶ所に登場する。『ホルテンシウス』と「プラトン派の書物」が共に『告白』8巻で語られていることは、8巻が、3-7巻の物語を総括するものであることを示している。
- 7 アウグスティヌスに於いてマニ教の教説に対する疑念は、何よりもまず、彼らの説く可感覚的世界についての教えと哲学者達の自然科学的知識との矛盾によって生じたものであり (Conf. 5, 1-3)、ファウストゥスへの失望の理由もまた第一義的にはその調和が果たせなかった点に求められている (Conf. 5, 5, 8)。
- 8 『告白』に於けるアカデミア派懐疑論の肯定的意義と、霊的聖書解釈の習熟に対するその影響については山田 (2011)。
- 9 この点に関しては田中 (2001, esp. pp. 38-39)。
- 10 396年に書かれた『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』でアウグスティヌスは、自身がマニ教の教えに捉われていた期間を9年間としている (CEF 10, 11)。これは373年19歳の時に『ホルテンシウス』を手にしてからファウストゥスとの会見の機会を得る382年までを指すものであり、『告白』3巻から5巻の前半で語られる期間に相当する。我々はこの期間を、アウグスティヌスがキリスト教から離向していく期間であると同時に、マニ教の体系へと熱意を以て習熟していった期間であると看做すことが出来よう。他方、彼がキリスト教の洗礼を受けることを決心した庭園の回心が、386年32歳の時に生じたことを考慮するならば、382年以後の4年間をいわばノミナルなマニ教徒——但し、彼自身は「既にマニ教徒でもなければ、キリスト教徒でもない」(Conf. 6, 1, 1) と述べている——としての期間と看做すことが出来る。このようにアウグスティヌスのマニ教時代を13年間と見積もる場合、マニ教とキリスト教との対比が非常に明確となる。というのも、5巻後半から7巻の物語はキリスト教への離向の物語の一部であると共にマニ教からの離向の物語でもあるのであって、キアスムス構造を示した図表の中の (A) →離向→ (E) →離向→ (A') がキリスト教への回心を巡る物語として、(C) →離向→ (E) →離向→ (C') がマニ教への回心を巡る物語として、『告白』の内極めて対照的に語られていることが明らかとなるからである。
- 11 悪を善の欠如とする議論が、プロティノス—アンブロシウスの線を引き継いだものであることは、Courcelle (1968) ならびに山田 (2010a, pp. 28-29) 参照。
- 12 『神の国』8-10巻でのプラトン派に対する批判は、アプレイウス (c. 123-?) のダイモン論の検討からポルフェリオスのダイモン論の否定へと進み——この過程でアウグスティヌスが受肉した御言葉、即ち仲保者としてのキリストの必要性を論じていることは興味深い (DCD 9, 15) ——、最終的にポルフェリオスの新プラトン主義の拒絶へと収斂していく。また同書で彼は、自説を補強する為に時にプロティノスの権威に訴えており (DCD 9, 17; 10, 2)、この意味で我々は、プラトン哲学の復興者

- としてのプロティノス (CA 3, 18, 41) と、ポルフェリオスの新プラトン主義とを区別して考える必要があるように思われる。
- ¹³ ここでは「ヨハネによる福音書」の「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」(Ioh. 14:6) というイエスの言葉が念頭に置かれている。
- ¹⁴ アウグスティヌス時代のマニ教については山田 (2010b) 参照。
- ¹⁵ 『アカデミア派駁論』に於いてキケロはストア派と対立したアカデミア派の哲学者として描かれる (CA 3, 18, 41)。これは同書に於いてストア派の哲学が本質的にアカデミア派のそれと相容れないものと看做されていたことに拠ると思われる。とはいえ『神の国』ではキケロの思想のストア的側面への言及が認められる (DCD 4, 30; 5, 9)。
- ¹⁶ 『告白』の構造論的分析は、アウグスティヌスの半生の物語が、いわば素朴なキリスト教から洗練されたキリスト教へ、見かけ上は「理性的キリスト教」であったマニ教を経て回帰する物語であったことを示している。その意味で、彼の「放浪」の物語は「キリスト教」という枠組みの外に出ることがない。従ってアカデミア派や新プラトン主義への回心といった今日の我々の問いが、果たして、彼自身の意識の上にとどの程度の切迫性をもって存在していたかは、再考の余地があるように思われる。
- ¹⁷ 『告白』によれば、シンプリキアヌスは「アンブロシウスが洗礼の恩恵を受ける時に靈的な父の役割を果たし、アンブロシウスは本当に自分の父であるかのように彼を敬愛していた」(Conf. 8, 2, 3)。
- ¹⁸ 「詩篇」113:24 のこの箇所はセプチュアギンタには“ὁ οὐρανὸς τοῦ οὐρανοῦ τῷ κυρίῳ, τὴν δὲ γῆν ἔδωκεν τοῖς υἱοῖς τῶν ἀνθρώπων”とあり、またヒエロニムス版ヴルガタでも“caelum caelorum Domino terram autem dedit filiis hominum”と訳される。なおクレメンティヌス版ヴルガタも“caelum caeli Domino; terram autem ...”とヒエロニムス版に従うが、1979年公刊のノヴァ・ヴルガタは「詩篇」115(113B):13として“Caeli, caeli sunt Domino, ...”という読みを示している。
- ¹⁹ 『83 問題集』でアウグスティヌスは、ギリシア語 “ἰδέα” のラテン語に於ける訳語の一つとして “species” を挙げている (De div. Qu. 83 q. 46)。
- ²⁰ “Credo in unum Deum, Patrem omnipotentem, factorem caeli et terrae, visibilium omnium et invisibilium” (cf. Denzinger and Schönmetzer 1976, p. 67)。
- ²¹ アウグスティヌスは『神の国』で「創世記」とプラトンの『ティマイオス』の類似性について言及している (DCD 8, 11)。
- ²² この箇所への集中的研究として加藤 (1976) を参照。
- ²³ この点でアウグスティヌスが『神の国』に於いて、プロティノスの摂理論を紹介し、それを高く評価していることは興味深い (DCD 10, 14)。
- ²⁴ Williams (2002) の議論は、全般に新プラトン主義の影響を過小評価しているように思われる。Nussbaum (1999) を引用して新プラトン主義を単に「主知主義」と定義する点 (Williams 2002, p. 174 note 6) は、プラトン主義対キリスト教という一昔前のテーマに我々を引き戻しているように見える。とはいえ、ミラノとオステリア、二つの上昇体験に対する彼の議論は、特に恩恵の下で「聞くこと」に対し推論的知の特質としての「見ること」の有限性を対置する点等、見るべきところが多い。

(やまだ・しょうたろう 筑波大学人文社会科学部 哲学・思想専攻
／日本学術振興会特別研究員DC)